OB会報

湘南サッカー部OB会報　第25号

スペイン遠征に同行して

OB会副会長　41回　相羽　克治

3月25日（土）、朝5時40分、横浜発の電車で全員無事そろい、一路成田空港へ。

9時35分発、AF279便にて13時間かけパリCDG空港着。乗り継いでビルバオ空港に降りたのが現地時間20時（日本時間26日の朝3時）。すぐにバスに乗り込み、スペイン1部のリーグ戦、22時キックオフの「ビルバオ対オサスナ」観戦に、市内にあるサンマメス球技場へ。長旅で、皆多少バテ気味であったが、球技場が近づくにつれ町中にあふれる人・人・人…、そして溢れる熱気と盛り上がりに疲れを忘れてしまう。バスを降りてお弁当とチケット（連番は取れなかったのでバラバラの席）を受け取り、人の群れの中に吸い込まれ各々の入り口ゲートへ。

土曜日でダービーマッチ（同じバスク州のチーム）のせいもあってかスタンドは超満員。相手チーム、オサスナの応援席は一つのコーナーの狭いスペースで、99%が地元応援。夜遅くの試合にも関わらず、お年寄りや女性が多いのには驚く。ナイスプレーに対する歓声やレフリーのジャッジ・ミスプレーに対するブーイングなど、自然に、一斉にわき起こり一斉に静かになる声援、また、試合を上手く盛り上げる応援風景はさすが本場と感心させられた。試合は地元ビルバオが1―0で勝利し、私も含め周りの人たちは誰彼無く握手・握手。試合後の球技場の外は、人の数の割にはさしたる「バカ騒ぎ」も無く、ビルバオの人達は大人しいのかなと感じる。

宿舎のホテルは、ビルバオからバスで約30分の小さな町ジョディオにあり到着したのは午前1時。

初日は、朝5時から実に27時間活動（機中では睡眠をとったが）していることになった。身体は疲れているはずだが1日の変化の激しさと諸々の興奮で、何か夢を見ているような感じであった。

翌日は休息と夕方の軽い練習で体調の回復をはかる。落ち着いてきて、近くを散策しているうちに少しずつスペインにきているのだなーと実感するようになった。

アスレチックビルバオは創設以来百余年リーグ一部を維持している名門で、バスク人のプレイヤーだけで成り立たせている。トッププロチームの下に、2軍（サテライト）そして選抜された25人枠の各年代ごとのトップチームがあり下部組織が構成されている。本拠地のアスレチッククラブには、トッププロの練習場のほか8～9面の天然芝・人工芝のグランドがあり、クラブハウスも充実し、その立派さには驚かされた。それ以外、ビルバオの周辺には町村のクラブが有り、各々それなりのグランドとクラブハウスを有し、各年代トップ入りを目指し頑張っている選手も多い。学校でのクラブ活動はなく、皆学校が終わってそれぞれのクラブで活動をする。トップチームには遠くからの選手も多く、宿舎生活で近くの学校に通うわけだが、成績がわるいと地元に返されるらしい。

3日目からは夕方～夜に試合があり、午前中は休息・散策・観光（バスでゲルニカ・大西洋、ビルバオ市内でショッピングなど）で過ごす。

試合は近隣のクラブ3チームと5試合、トップのビルバオとの試合が1試合組まれた。初戦の2試合は雨の人工芝と柔らかいボールに戸惑い敗れたが、それなりの経験ができ、あとの3試合では内容も良く2勝する事が出来た。29日に行

われた同世代のトップチーム・ビルバオとの試合。日本で例えたらU―17の関東いや東日本選抜位の相手。とにかく体格が大きくスピードが違った。

トラップからの切り返し、トラップからのキック・シュート、動きだしの最初の一歩……全てスピードがあった。湘南は普段通用する切り返しや相手との間合いが、スピードと足の長さの違いで通用せず苦戦する。それでもボールを持った選手に対し執拗にからみつき精一杯動く。結果は0―5の完敗であったが「壊れた試合」ではなかった。3点は相手トップの強力な個人技によるもので、完全に翻弄され崩された訳ではない。こちらもシュートチャンスはあり、相手も紳士的でなめられたり、遊ばれた感じはなく、見ていてそれなりに納得のいく、満足のいく試合であった。選手たちは他の試合に比べ、心身ともに数倍疲れた様子だった。ただ、「このチームと試合をした」と言うことが今後に大きな自信を植え付けたことは間違いなく、この気持ちでプレーが出来れば桐蔭や桐光相手に充分互角に戦えると思った。また、ここではビルバオ側が天然芝の最高のグランドを提供し（日本人が使ったのは初めて）、スタンドには多勢の観客など、色々な面で本当に貴重な経験が出来たことは素晴らしい事だった。

31日（金）には朝6時にホテルを出て、バスで700キロ離れたバルセロナへ。私はそこで一人別れパリ経由で帰国の途につく。皆はバルセロナでも勝ち試合をし、市内観光とパリで1日楽しんで4月4日（火）無事帰国。

最初の強行日程、食事時間や質の違いなどで、体調を崩す選手が1人、2人と続いたが大事にいたらず、また、大きな事故も無く全員一緒に帰って来られたことにホッとしている。

〈メモ・雑感〉

・4年前、最初に話を聞いたときには「高校生がスペイン遠征なんて贅沢だ」と思いました。

ただし経緯を聞くと「先に遠征ありき」ではなく、清水先生が日本協会の研修でビルバオ滞在中におきた20年振りの後輩（嶋貫氏）との出会いがキッカケとわかりました。詳細は省きますが、折角のチャンス、縁を生かしたいと言うことで始まりました。今回同行して、この経験はサッカーだけでなく、いろいろな面でプラスになると確信しました。

・2人の女子マネージャーが参加したのですが、それなりの厳しい日程・環境変化のなか、体調不良の時もあったと思います。それでも、選手達が休んでいるときでも、するべき仕事はキチットしていました。本当によく頑張ったと思います。我が家と同様に、やはり女性は強いのでしょうか？

・嶋貫氏とスペインのエストラーダ氏に感謝。今回のマッチメーキングは理想的でした。五分の力の3チームに格上の1チーム。先方の施設も待遇も申し分ありませんでした。また、観光面でも充実していてビルバオの良さを充分味わえました。

・どの試合もレフリーは正式な審判員でしたが、いずれも線審はいませんでした。色々な理由があるようですが、チョット不思議に、また、なるほどと思わされました。

〈OB各位〉

遠征全体を通じて、普段の先生のご指導の結果でしょうが、団体行動・自由行動問わず、さすが「湘南の生徒」と感じることが多々ありましたし、安心して見ていられました。JTBの加藤さん、コーディネーターの嶋貫さんが、「他の団体に比べてはるかに楽です」とおっしゃって下さった事はOBとして嬉しく思いました。

今回の遠征は生徒一人ひとりにとって大変意味のある、「明日からの自分が多少変わるのではないか」ぐらいの貴重な経験をしたと思います。また、今後に生かす（力）も持っていると感じます。

選手37名、マネージャー2名が参加し、グランド上含め実際に選手の世話をするのに先生一人では厳しく、今回は78回の鈴木君が同行してくれました。今後も実際に動けるOBの同行が必要だと感じましたので、OB会として協力体制を維持していければと思います。

これからもOB皆様のご支援よろしくお願い致します。

ドイツワールドカップ

39回生　小杉　溥孝

昨年秋に、同期の山宮通弘君と女房連れでワールドカップを見に行こうと相談が纏まり、早速どの試合を見るか決めて第3次販売に7試合分を申し込んだ。結果はスペイン対サウジ戦のみが当選した。それではと、4次販売に挑戦したがインターネットでの競争が激しく2時間格闘した末に販売終了となってしまった。そんな折、鈴木先生がツアーを組んで行くとの話を小耳に挟んで後日それに是非加えてもらおうと相談した所、即座

にJTBの小沢君（先生がクラス担任）に電話をしてチケットの手配までしていただいた。（クロアチア戦とブラジル戦）。ツアーには41回の福井民雄君、43回の加納正道君夫妻、44回の小杉勝実君夫妻もいて楽しい旅であった。総勢31名がそれぞれの都合にあわせ8通りの工程を組んだ珍しいツアーだった。

六月十七日クロアチア戦を目指して出発した。豪州戦が終盤の猛攻に耐えられず逆転負けをしているのでクロアチア戦に勝つことが必須だが、大会前のドイツ戦・マルタ戦そして豪州戦と観ていると日本チームのピークはドイツ戦であったと感じていた。試合会場に行くバスの中も今一盛り上がりが悪い。試合内容は皆さん御存知のとおりで、川口のPK阻止に喜び、柳沢のシュートミスに失望し、どちらに転んでもおかしくない試合だったが結果は引き分けた。負けなくてよかったと皆感じた。

次のブラジル戦はどう観ても勝てる確率は殆ど無く、予選通過を決めているブラジルが数人控え選手を先発させたが彼我の力の差は目を覆うばかりであった。コンフェデ杯で2―2と引き分けているのでもしやとの思いを持った人も多かったと思うが、自分を売り込む最大の舞台で手心を加える者など一人もいないのは当然である。玉田の得点は素晴らしいものであったが、後半はブラジルに圧倒されっぱなしだった。

トルシエからジーコに代わり、規制から自由へとサッカースタイルが代わり日本の力も進歩してきたと思っていたが、世界との差はまだまだ大きいと実感した。特に体力面の差が顕著だと思った。1対1の弱さやそれをカバーするパスワークサッカーでの運動量が少なく、特にボールを受ける位置への移動が非常に少ないのが目に付いた。これで日本のワールドカップは終わったのだと実感した。

翌日、スペイン対サウジ戦を見るべくカイザースラウテルンに列車で向かった。

ライン川沿いを行く列車からの景色は美しく時間を忘れて見入っていた。マンハイムからのローカル線はワールドカップ一色で日本人もかなりいた。駅に着くと町中お祭り騒ぎで、何処もそうであったが賑やかであった。スペインはトーナメント進出を決めていたので先発全員が控えであった。そんな中、フォアキンの鋭いドリブルやワンツーでの切込みが目を引いた。試合はセットプレーからCBファニートの豪快なヘッドで決まった。翌日帰国したが、その後オシム新体制になりサッカーのコンセプトも変わった。更なる進歩を願い次回の南アフリカへの夢をかなえてほしいと願っている。

夢が実現

39回生　山宮　通弘

今年のW杯ドイツ大会『鈴木　中グループ／ドイツW杯観戦ツアー』に参加して参りました。

同期の友人夫妻とも一緒に久しぶりの夫婦海外旅行でした。海外のW杯を一度経験してみたい夢が実現した訳です。しかも日本代表を応援しながら世界のトップレベルの選手のプレイを目の当りに見る事が出来、至極満足なツアーでした。

高ぶった気持ちでミュンヘンに最初に降り立ち、翌日ツアー一行はバスでニュルンベルグへ向った。日本VSクロアチアを観るために集まったサポーターが市内至る所に居て歓声を発しまさにお祭り状態であった。日本人サポーターとクロアチア人サポーターがお互いのユニフォーム姿で肩を組んで記念写真を撮り、ビール片手に乾杯を何度も酌み交わす光景が街のあちこちで見られ、共に戦う前のお祭り的盛り上がりは「これがW杯なのだな！」と感じさせてくれた。

日本のサムライブルーは赤白の市松柄に隠れんばかりの多くのクロアチアサポーターに埋もれたスタジアムでは「ウォー」という大歓声に圧倒され、ヨーロッパの各リーグのTV画面を観ていた時と同じ様な音が響き続けた。サッカーというスポーツの人気や関心またそれに関わる文化というものが日本におけるものとは全く違い生活の中にしっかりと入り込みそれにより喜怒哀楽を表現しているとまで言えるような気がした。

観戦と観戦の間にいくつかの街を観光したが、どんなに小さな街でもパブリックビューイングがありそこにサポーターがあるいはサッカー好きが集まりビール片手にワイワイ話しながら楽しんでいる光景を多く見た。

こうした中に各国のサポーターが入り交じりそれぞれの国を表すユニフォームや国旗等をかざして自国の存在や優位を誇示している様子はスタジアム外のW杯と言えた。

残念ながら結果は周知の通りでしたが日本代表もクロアチア戦での取りこぼしがなければ決勝Tまで行けたはずです。ブラジル戦は1stハーフまでは集中できたが後半はまるで気力が無かったのでブラジルの強さだけが目立った結果となった。

他の各試合はそれぞれスピードと迫力のある戦いが続き本当に強い国を決めるに相応しいものでした。帰国後に見た決

勝トーナメントの各試合はどれも息つく暇も無い驚くようなスピードと強い当たりと速いシュートで連日寝不足にさせてくれました。こうした決勝Tの中で日本代表を応援できる日は私の生きてる間に有るのかと思うにつれて今回がそのチャンスだったのかも知れずと思い帰国までの数日間ドイツ国内やチェコを回りながら次期W杯に思いを繋げてみたい気になってました。

湘南サッカー脈々

54回生　篠塚　毅

昭和五十三年十一月三日、横浜三ツ沢球技場、全国高校サッカー選手権・神奈川予選準決勝、湘南対旭、それが私の高校サッカー最後のイベント。0対1で敗戦、翌日の新聞紙上では「湘南善戦」という論調で報道されたが、その日の湘南は明らかに浮き足立って自分たちの意図する試合が出来ず「やるだけやった」という満足感と「あの代のメンバーをもってして何故全国大会へ行けなかったのか」という悔いが交錯し、自分の湘南サッカーの思い出は常に（青春時代にありがちな）「甘酸っぱい」ものとなっている。

その甘酸っぱさの中にこの年になって、また、どっぷりと引き戻された。愚息・貴志の湘南サッカーもこの七月、終了のホイッスルを聞いたわけだが（彼もまた、悔しさの中で引退を迎えたようだ）何か二十数年前の夢の続きを見せてもらったような、フワフワした感触が今まだ、体の中に残っている。

当時、私をご指導下さった（私のサッカー観の土台はその時築かれた）鈴木中先生も毎試合、お元気にグランドで指導して頂いた。（「シノ、上がれ！」と先生から息子に指示が出るとドキッとする。おいおい、あの時と同じフレーズだ）時に対戦相手となった北陵高校監督は同期の藤塚先生だ。（審判のジャッジに激昂しベンチをけり倒していたかと思うと、私を見つけると猫なで声で「もう、大変だょ～」とか寄ってくる。普段は「温厚な紳士」だが現役当時もよく「暴発」してたっけ…）。

また貴志の同期には渋谷大先輩のご子息、久保さんのご子息もおられ、脈々と流れる湘南サッカーの絆を感じずにはいられなかった。（特に久保さんは私の一年後輩に当たり、現役時代の私の「傍若無人」ぶりをよくご存知なので、全く恥ずかしい限りであったが）

また、貴志にとっても非常に幸せだったことは、よき先輩たちに恵まれ、多くのご父兄に応援頂き、そして何より清水先生が目指しているサッカーにぶれが無く、その戦術・戦略に心酔し、この二年半、湘南サッカーに心底打ち込むことが出来たことではないだろうか。（惜しむらくは清水先生の4バック+ボックスの戦術には傑出したサイドバックが必要で、そのポジションを任された貴志が「傑出」ではなかったことが＝彼なりに必死だったことは親バカですが認めてあげますが＝悔しいやら、申し訳ないやら、貴志の同期の皆さん、後輩の皆さん、応援頂いたご父兄・OBの皆様、この場をお借りしてお詫びします。ごめんなさい）

今までOB会活動も関先輩、武藤先輩はじめ諸先輩方にお任せし、ただ懐かしく会報などを読ませて頂いていたわけであるが、親子二代にわたり湘南サッカーの伝統に、その絆に触れてこられた幸せを少しでも恩返しし後輩に受け継げるよう（私がだめでも愚息が）ご協力させて頂きたいと思う今日この頃である。

親子で湘南サッカー部

55回生　久保　徹

息子の大輔が生まれたのは1988年12月、湘南高校サッカー部が全国高校サッカー選手権大会に出場した年でした。乳飲み子と産後間もない女房を実家に預け、3日間三ツ沢に通い、声を枯らして応援しました。当時、職場のサッカー部でプレーしていた私は、子供が生まれた機会に引退を覚悟していましたが、この湘南の活躍が女房の心を動かし、何とか続けることができました。（後に女房から、こんな高校生に育って欲しいと強く感じたことを聞かされました。）大輔が3歳の頃からは試合に子連れで行くことが義務づけられ、私と大輔の数奇な人生が始まりました。週末は親子2人でおにぎりを持たされて、県内を西へ東へサッカー場めぐりの旅。サッカー場で大輔が行方不明になったこと、試合中にオシッコを漏らしたこと、相手チームのドリンクを持ってきてしまい一緒に謝りに行ったこと、ファウルを受けて倒れている私目がけて泣きながらピッチに飛び込んできたこと、珍道中は数え切れません。あ

る大事な試合でPK戦になり5人目のキッカーに指名され、冷静にボールをセットして助走に入ろうとしていた時、試合そっちのけで遊んでいたはずの大輔がコーナーアークでボールの上に座り「父ちゃん、がんばれ！」という真っ直ぐな声援。ドラマのように劇的な結末にはならず、力んだシュートはバーの遙か上を虚しく飛んでいきました。試合後、「父ちゃんの下手くそ」と本気で怒って泣きながら飛びかかってきて、それ以来、私の試合について来ることは無くなりました。

大輔が自分のサッカーに専念し始めたのは、それからだと思います。ここで立場は逆転し、私は少年サッカーチームのコーチになりました。ただ、これまではプレーヤーとしてしかサッカーに関わってこなかったものが、4級審判員になり、指導者の資格も取り、時にはサポーターにもなり、お陰でサッカーにいろいろな楽しみ方があることを知りました。

その後、大輔は中学でもサッカー部に入り、私も四十雀からオファーを受け、別な人生を歩み始めましたが、大輔は湘南サッカー部に入りたい一心で、一発奮起して湘南に入学。ものすごく長い前置きでしたが、ここで女房が夢見た「親子で湘南サッカー部」が成立しました。

私は、湘南サッカー部が今もこんな熱心に活動しているとは思っていませんでした。大輔の学年は人材も豊富で、サッカーのために学校に通っている子が大半でした。吐くほど辛い走り込み、いつ終わるか分からないダッシュの繰り返し、修学旅行にボールとトレーニングシューズを持ち込んでの早朝練習、心から信頼できるサッカー部の仲間達との出会いなど、聞く話は30年近く昔と変わりません。岩淵先生が優しい眼差しで見つめる横で厳しい指示を出していた鈴木中先生が、今では清水先生の横で孫を見るような目で高校生達を見守ってくれています。大きな違いは遠征先が静岡からスペインに変わったことくらいでしょうか。とにかく毎日サッカー中心の高校生活。我々の頃のように酒を飲むこともなく、一体何が楽しいのかと思っていたところ、息子が一言。「サッカーが本当に楽しい。今まで親爺の影響で当たり前のようにサッカーをやってきたけれど、今になって、どうして俺はサッカーをやっているのかがやっと分かった。」

17年も掛かってようやくサッカーの楽しさが分かったバカ息子と、それが分かったお陰で45歳を過ぎてもサッカーがやめられなくなったバカ親爺のサッカー人生は、まだ当分続きそうです。そして、2人共通の原点が、この湘南サッカー部にあります。

県議会サッカー部、まだまだいける！？

56回生　水戸　将史

すでに7年以上も前に神奈川県議会においてサッカー部が設立された。これの推進役となったのは、湘南（旧平塚）ベルマーレの元日本代表選手であった森県議であったが、さらに我が湘南高校出身の番場先輩（34回）、そして小泉先輩（39回）らも中心となって、立ち上がったのである。

折りしもワールドカップ2002の日韓共同開催が本格化し、各開催会場の整備が急ピッチに進められているときである。発足当初以来、体力・テクニックは仕方がないとしても、精神面だけは勝ることをモットーに、県庁サッカー部や近くの中・高校生などを相手に試合などを行っていたが、やはり目は自ずと海外ということに…。そうして間もなく、神奈川県が姉妹提携を結んでいる韓国・京畿道の議会との交流試合を行うことが決まった。

初戦は敵地に乗り込んでみたものの、前夜祭に「バクダン」というお酒をシコタマ飲まされ、2―5の完敗。次戦は翌年、相手チームを横浜の日産スタジアムに招き、2―0の仇を打つことができた。

そして今回のドイツ大会。これまた県がバーテンビュルテンブルグ州と姉妹提携しているとあって、昨年6月にかなたドイツの地に乗り込んだのである。わずかチームメートは13名でかなり脆弱だ。まして、日本との時差は7時間、そして夏シーズンは夜の10時くらいまで明るいので、滞在中の夜更かしは当然。試合当日、現地の議員以外にも助っ人で、町長さんや、警察署長、学校の先生などが加わった混成チームと一戦交えることとなった。

キックオフは午後6時、開始ホイッスルが鳴った直後に190センチを超す巨漢に次々なぎ倒され、敢えなく失点。さすがはサッカーの本場、老若問わずサッカーのコツを良く知っていた。結果は2―6で相手に花を持たせることとなったが、やはりサッカーに国境は無〜い。お互いビールを煽って健闘を讃えあい、ドイツ大会で日本サッカーがどれだけ頑張るかに話題は集中した。

今、県議会サッカー部で話し合っていることは次回の課題である。2010年開催国の南アフリカ。ちょっと行ってみたい気もするが、かなり遠く未知の国だし、日本なんて知られているのだろう

か、まして神奈川なんて…アポも難しそう。

それならば、まずはオリンピック開催の中国チームとの対戦は・・・。遼寧省とは姉妹提携を結んでいるし、比較的近い。よ～しチャレンジだ！ということで、部員一同、来年に向けて気勢だけは上げているところである。しかし、もっと若手人材を入れなければ平均年齢は着実に上がっていくし、軍資金も心もとない。それに何よりも、来年4月以降の我々の身分保障はもっと切実な問題だ。何とか国を超えたグローバルな関係をサッカーにも求めていきたい、目下衰えつつある体力と筋力に相談中なのだ。

「日本のサッカー事情」

元顧問　鈴木　中

何時もOB会のHPに勝手な事を書かせて貰っているので、今回のOB会報には少しまじめな話を書いてみたいと思い筆を執った次第です。この春まで神奈川県サッカー協会長と言う立場だったので、今まではあまり中央（日本サッカー協会）を批判する事を控えていたが、今回はフリーな立場でモノを言ってみたい。

先ず日本の会長「キャップテン・川渕氏」について一言、彼の実績については高く評価できるものは多くあるが、所詮人間のやる事ゆえ、彼の強引さについて、そろそろ周りも鼻についてくる頃だろう。悲しいかな周りの人事を自分の好きな人間を集めて、イエスマンだけで事を進めているので、内部でも批判分子が出てくる頃、又サッカー協会以外の人達を敵に回しているので、落ち目になったときはマスコミからも足を引っ張られるだろう。日本の総理大臣然り・アメリカの大統領然りである。引き時が大事だろう。

全てスポンサー、放映権料から来る金の力でモノを言い、成功して来たかに見えたが、一番大事な参加者の登録料で成り立っている事を忘れている。次に大きな問題は学校スポーツを批判するだけでなく、切って捨てる方法で高体連・中体連、を無視してきた。そして明治以来百年の歴史ある学校スポーツ界を敵に回してしまった。確かに時の流れはJリーグを中心にした、社会スポーツであるが、日本の社会は学校を無視しては成り立たない。

さてオシム・ジャパンであるが非常に程度の低い事ばかりが耳に入ってくる代表選手がテレビゲームは禁止・携帯電話の使い方・・湘南高校の現役選手への指導は全て生活指導・人間関係・・要は世の中自律出来ない選手ばかりで指導者が「規律・正義・生活」とサッカー以前の話ばかりが監督の仕事で、何を日本のサッカー界は目指しているのか良く見えてこない。

そこで物申したい「先ず・ディフェンス感覚をどう教えるか」「外国人選手相手の高さへの対応」この事だけでも見えてくると安心できるのだが・・オシムさん頼みますよ。

日本サッカー界に何故ストライカーが出てこないか・・子供の頃から点を取る面白さを教わって来ないから、みんな中村俊輔・小野伸二・ボールをこねるのがサッカーだと勘違いを起こしている・・そして子供達にGKの魅力を教えていないのは何故だろう。日本は世界に通じるGKの出現が最大の課題である。

湘南ペガサスクラブも高令化が進んで70才以上メンバーが年々増加し、以下のような高令者対象の行事に参加しています。

ペガサス70才以上の活動

福井大会遠征世話役　26回生　酒井　佐弘
27回生　山本　修

1．福井ロイヤルエイジ大会

70才以上対象の第5回福井ロイヤルエイジ大会が9月17日（日）18日（月）に福井県三国町で開催され、湘南OBサッカークラブの名前で3年連続で参加しました。湘南OBは下記の10人が参加、OB以外の湘南ペガサス4人を加えて、14人で遠征しました。

湘南OB参加者　小林（24回）、川島（25回）、酒井、鈴木（26回）、山本（27回）、近藤、嶋田、末永（28回）、塩川（29回）、中原（30回）

70才以上のサッカー人口の増加を反映して、大会参加数も一昨年8チーム、昨年11チーム、今年は13チームに増えています。どのチームも、60才代の間サッカーを続けて70才になった若手の新規参加により強化されているようで、今年は1勝2敗の苦戦でした。

9／17　湘南OB　0―1　神戸FC
9／18　湘南OB　0―1　北信越連合

湘南OB　7―0　関西白線ク

得点　嶋田2　酒井　小林　佐野2　高木

2．60才以上大会の70才以上ロイヤルゲーム

60才以上が対象の菅平大会（5月26～28日）、刈谷大会（10月14・15日）では、参加各チームの70才以上を集め、ロイヤ

ルゲームと称して紅白親善試合が行われ、湘南ペガサスの70才以上メンバーが参加しました。

70才以上の増加に対応して、刈谷大会では、西日本元老、名古屋クロウズの2チームは70才以上の単独チーム編成、その他はブロック分け連合チームで出場しています。

3．70才以上目標の行事

以下の行事では、70才以上対象を意図して企画されているが、参加しやすいように年令制限を若干緩和して実施され、湘南ペガサスが参加した。

県シニア交流会　68才以上、月1回平日、1～10月に8回開催

湘南ペガサス単独チームと県内5チーム連合との対戦

Gリーグ平塚　69才以上　7／15
Gリーグ横浜　原則70以上　8／19
県シニアフェスタ　69才以上　11／12

4．その他の高令者対象の行事

各種の60才以上大会の付帯行事として、高令者対象の行事がいろいろな年令制限で開催され、湘南ペガサスは以下の行事に参加した。

第3回清水大会　67才以上　3／18～20
Gリーグ埼玉　66才以上　4／9
Gリーグ栃木　66才以上　7／1・2
Gリーグ横浜　66才以上　7／22
Gリーグ埼玉　66才以上　10／9
関東シニア大会　65才以上　11／25・26

ペガサス60の活動報告 2006

32回生　牛尾　慶邦

全国的60シニア大会の隆盛はもとより70を意識した大会や練習会も益々盛んになってきたと感じます。各リーグ役員や30回中原さんを含む協会役員の長期的な計画努力によるものでしょうか。60を代表してこの報告をするに当たり、その個々のゲーム記録より、年々続いてくる人達の励みと刺激になることを願ってのチーム内事情を主にした内容にしたいと思います。70代活動は27回山本さんの報告に詳しく記述されているので重複しない部分を述べることにします。

全体を見ると今年度大会として4月から11月までに70代およびO—66のみの大会を除いて通算67試合を21日間で行いました。0—60は14大会51試合12勝31敗、同日開催での66～ロイヤルは8大会16試合4勝5敗。なお、前年度分の3月18～20日清水大会はこれに含まれていません（O—67は一次リーグ2勝、優勝決定戦PKで優勝）。また、この原稿締切り後の大会（県60雀最終戦、全国シニア関東予選兼関東シニア選手権）は余裕あれば追加します。

昨年あたりから兆しが見え、特に今年顕著になった湘南ペガサス60の特徴として、同日試合でのO—60のゲームも66以上ロイヤルのゲームも選手の顔ぶれがほとんど同じというのが多かったことが挙げられます。そういう時は平均年齢68～69才でした。湘南OBに限ると65才以下の参加がほとんどありません。50才になったらペガサス50へ、60才になったらペガサス60へという自然な移動がされないとこのように断続してしまうこと、従って大先輩たちから引継がれていくべき「他校・他チームが恐れ敬う湘南のパス回しなどの伝統と何より羨ましがる人材・人格の継承」も途絶えてしまうことに該当者は気を配るべきでしょう。これは、ゲームに負ける度に己の未熟さを棚に上げてぼやいた内容でした。　ただ、私どもがぼやく一方、今年後半にかけて特に篠田役員の努力と労力の結果、若く強く真面目な外部の人達の入会、参加者が不足するいくつかの試合でのビジター招聘、前向きに来年につなげるべく韮崎では50に所属する60才代のメンバーを主軸に加えたチーム構成を実現させたなども今後に期待して特筆されるべき点でしょう。

さて、このように年老いたクラスに偏重したゲームの多さ（最多は30回中原さんの2日間でO—60とロイヤル合わせて6試合フル出場など）を読んでお感じのとおり、今年のもう一つの特徴（当然の結果？）として怪我人が目立ってきたことも挙げられます。最近はこれまで決して聞かれなかった「年寄りはロイヤルクラスのゲームだけにしたいよなあ」の冗談も聞かれるようです。

もう一つ、審判要員が不足して、県リーグは同じ人達に担当を強いる結果になりました。参加させてもらっている以上自発的に講習受講を申し出るのが自然ですね。

課題ばかり述べていますが私見も含めて60が「楽しむ活動」であることを再認識したいものです。県リーグでも60は別格ですね（にもかかわらず新規参入が決まった茅ヶ崎赤羽根チームや茅ヶ崎えぼしはあくまでも勝つことにこだわり熱心な練習を続けて目つきが違うとか）。ペガサス60の中でも「楽しむにはやはり勝つことも重要」という人がおり理解はしますが、そのあまり　自分の行動を省みず自己の主張のみを押し付ける過ぎた言動が止まずチーム内の恥ずかしい争いの基となった人がいました。今後避けたいものです。

追加情報：前述のように来年度につな

がるペガサス60編成を目指してペガサスの60外所属年齢適格者を積極的に加えたチームを韮崎でテストした形でしたが、その本番とも言うべきJFA主催全国シニア（60才以上）関東予選が11月25、26日開催され見事3位を勝ち取り19年5月予定本大会出場権を獲得しました。今年度の沈滞を吹き飛ばし来年度若々しく躍動するペガサス60チームを大いに期待します。

ペガサスシニアB この1年

42回生　阿部　裕

シニアAから主力2名が加わり、昨年の反省点を改善して優勝を目指そうと、平成18年度神奈川県50雀2部リーグのシーズン開幕戦を待っていました。ところが今年も開幕戦が雨で遅れ、昨年よりさらに遅い6月3日、またも待ちくたびれの状況で開幕戦を迎えましたが、その「藤沢・浅野」戦は滑り出しからパスも面白いように回り、非常に良いスタートが切れたと感じながらプレーしていました。ところが8割方相手陣地でパスを回し、シュートも数えられないほど打ちながら得点出来ず、後半も同様に得点は時間の問題という展開の中、逆に残り5分相手の一本の縦パスがBKとGKの間の微妙な所に出て、決められてしまい、サッカーではよく有るパターンとは言え一番悔しい最悪のスタートとなってしまいました。残念ながら結果的にはこれが最後まで尾を引くことになってしまったのかも知れません。気を取り直して臨んだ6月17日の第2戦「dfbグランパ」戦でしたが、お互い蒸し暑さと連日のW杯のTV観戦による寝不足も有ってか、お互い決め手を欠き一進一退の試合で0対0の引き分け。初戦が遅かったので前期の最終戦となる7月8日の第3戦、相手は一部から降格してきた「秦野」でしたが、前期を五分で終わるためには是非とも勝たなければと気合いを入れて臨み、互角の戦いをしチャンスも同じくらい作ったのですが、やはり決定力の差が出て0対2の敗戦。結局前期は0勝2敗1分で、後期まで約2ヶ月のブランク、後期初戦は9月2日「いわさき」戦、昨年何かすっきりとしない負け方をしたチームですし、雪辱と初勝利を目指しましたが、非常に不可解な判定、不運、暑さにやられてしまいました。不可解というよりオフサイドの新ルールを分かっていながらの完全なミスジャッジ、両チーム無得点の前半10分過ぎにオフサイドポジションにいた加納の頭上を越えてボールが入りましたが、プレーに関与していないということでプレーオン、その後後方から走り込んだ菅原がGKと一対一になったところで、オフサイドの判定。完全に1点を取り消されたという感じ。また後半も残り5分打った方もビックリのミドルシュートがゴール右上の角に決まってしまい、更に終了間際にセンタリングのミスキックが風に乗って直接ゴールインで万事休す。続く9月16日の対「横浜」戦、強敵を相手にケガ人3名を含む11名での戦いとしてはよくやったという試合。9月30日相性のいい「茅ヶ崎イースト」からも得点出来ず引き分け。そして10月21日の「ウィット」戦、なんと8戦目にしてようやく初得点、でもやはり終盤に追いつかれ、1対1の引き分け。10月28日の「多摩」戦、9戦目にして初勝利（2対0）、久し振りに勝つことの喜びを思い出すことが出来た試合でした。11月12日の最終戦「県庁」に勝って連勝し、両目を開けたかったのですが、先制しながらやはり後半相手のスピードにやられ、逆転負け。結局1勝6敗3分、得点4、失点13で、11チーム中10位と最下位争いという、もうこれ以上落ちようがない惨憺たる成績で終わってしまいました。こんな成績ですから、今年を振り返りたくもありませんが、やはり反省を踏まえて来年一試合でも多く勝利の喜びを味わうためには、平均年令58のチームとしては後半の運動量低下は止むを得ないとして、やはり毎試合ほとんど前半は優位に立て、決定的なチャンスもそこそこ作れているので、その中で確実に得点すること。そのためにはある程度強引にでもシュートを打つこと。シュートを打って来ると思わなければ相手は怖くない。打てば相手をゴール前から引き出すことも出来るし、相手のミスも生まれる。我がチームがよく取られる相手のラッキーなゴールは、シュートを打っているからこそのものだと思う。それと代表としての反省としては、ブランクを埋める練習試合を企画出来なかったことで、責任を感じている。来年度は、横浜、綾瀬は1部へ昇格、中沢、栄光が1部から降格、西湘が新規加入で、全12チーム。

平成18年度 ペガサスシニアA活動報告

43回生　坂部　治郎

現在までの公式戦の活動として、シニアリーグ50雀1部リーグを終了しました。

結果は8位とあまりよくありませんでした。内容は11試合を戦い、4勝5敗2分け得点10失点13でした。優勝は小田原シーガルズ、2位茅ヶ崎ベスト、3位秦野50雀、以下神奈川四十雀（50）、横須賀五十雀、横浜五十雀、平塚シニアFC50、ペガサスシニアA，茅ヶ崎五十雀ウエスト、dfbボロンズ、FCシニア中沢50、栄光クラブシニア の順となり、中沢と栄光が2部降格、来期は、2部から、横浜シニア五十雀と綾瀬五十雀が昇格になります。今季の特徴は、小田原と茅ヶ崎ベストを除き各チームの力が拮抗していること（4位から9位までの勝ち点差は5しかありません。）、2部からあがってきたチームが非常に強い（1位と3位のチームは今年度2部からの昇格チーム）ことかと思います。

我がペガサスは、前半戦は3勝2敗1分けとまあまあの戦績でしたが、9月からの後半戦は1勝3敗1分と分が悪く、結果的に8位に沈んでしまいました。今期のリーグ戦を通じて、負けたと感じた試合は対神奈川戦（1—3）と対小田原戦（0—4）の2試合でした。しかし振り返ってみるとこの2試合についてはメンバーが揃っていないにも拘らず、互角の試合を挑んだ監督である小生の采配ミスが大きかったと思います。そういう時は無理をせず、ディフェンシブの試合をしなければいけないと反省しております。

その他の敗戦の3試合（中沢、横浜、秦野）はどれも試合を支配していましたが、得点を挙げることができずいずれも0—1で負けています。今年は特に得点力に問題がありました。いかに効率的に点を取るか、また得点のパターンをチームとしてまだ確認できていないところに問題があると思います。一方、リーグ戦のベストゲームは、このところ負け続けていた今期2位の茅ヶ崎ベストに引き分けたゲームであったと思います。このゲームは全後半を通じてプレスがよくかかり、有利に試合を進めました。そして後半タイムアップ5分前についにコーナーキックを福永さんが直接ヘッドで決めて1—0、ついに勝つかと思ったロスタイム1分過ぎに相手のコーナーが直接入ってしまい引き分けてしまいました。

今年は、これから全国シニア予選、県議長杯トーナメント戦が控えています。籤運はあまりよくはありませんが、チーム力は去年よりもむしろ上がっていると感じています。これから年度末までに、より良い結果を出すべくチームとしてがんばりたいと思います。

ペガサスジュニア 2006 活動報告

監督　52回生　志水　利彰

昨年からジュニアの監督を務めている52年卒志水です。今年度の活動についてご報告します。

先ず、今年度のメンバーですが、昨シーズンオフより新メンバーの勧誘を積極的に行った結果、湘南卒業生では56回生の川島さん、59回生の大久保さん 卒業生以外からも2名に新たに加わってもらい平均年齢を若干引き下げることができました。若干若返ったとはいえ平均年齢は40台後半で夏場の試合は苦しい時があります。この会報を読んでいる40代の卒業生の方々に加入をお願いします。40雀の公式戦は全て日曜日ですので、土曜日に少年サッカーのコーチをしている方でも都合がつけやすいと思います。（私も少年サッカーのコーチとの掛け持ちです）広いグラウンドで思いっきりボールを蹴りたくなった方は、私か56回生の水上に連絡を下さい。正月の蹴球祭の時も良い機会だと思うので一度グラウンドに来て見て下さい。

さて、リーグ戦の状況ですが、今年度から3部ということで対戦したことのないチームが多く、何試合か勝てる試合を落としたり、引き分けてしまったりと苦しいスタートとなりました。結局1勝1分け3敗の7位で、前半戦を折り返しました。前半最終戦の強豪旭戦で新フォーメーションを試したところ、負けはしたものの内容では互角以上の戦いができたことで後半戦への手応えを感じました。夏休み後の後半戦ではこの新フォーメーションが機能し始め、試合を重ねるごとにお互いの理解度が深まったこともあり4勝1分け1敗と、大きく勝ち越し通算5勝2分け4敗の6位という成績でした。

リーグ戦以外では、正月の蹴球祭、春の付属戦、合宿時の現役激励、恒例となった東海大の人工芝のグラウンドでのペガサス祭りと諸先輩方と交流しながらサッカーを楽しむ機会が有り、一年間を通じサッカーを十分楽しむことができたと思います。

来季はリーグ戦では今シーズンの後半の戦い方をベースに、より上位に入ることをめざして、尚且つ今年以上にサッカーを楽しむことを目標としたいと思います。

トトカルチョ湘南 2006年度活動報告

79回生　櫻井　大輔

トトカルチョ湘南は、湘南高校サッカー部卒の仲間達が集まり、サッカーを本気で楽しもうとするチームです。サッカーというスポーツを本気で楽しむには、サッカーを純粋に楽しむと同時に、やはり勝負にもこだわることが必要だと思います。高校時代に全力でサッカーに打ち込んできた私たちは、ぬるいサッカーにはどこか物足りなさを感じてしまう。高校で築いた基礎を下に、本気でサッカーがしたい、勝ちたい、そんなニーズを満たしてくれるのがトトカルチョというチームだと思います。

チームの年齢層は19歳から35歳までと、とても広く、メンバーの変動も多いので、チームを作っていきながら、試行錯誤を繰り返し、勝利という一つの目標を目指して日々奮闘しています。世代を超えた仲間達はピッチの上ではもちろん上下関係はなく、遠慮もありません。そうした仲間達と目標を共有し、同じフィールドで汗を流しながら共に闘っていく。トトカルチョにいると、サッカーって本当に素敵なスポーツだなと思います。

今年の主な活動内容は、週一回の練習と神奈川県社会人リーグへの参戦です。今季は二部リーグに在籍していて、リーグ戦は月に一回～二回試合があります。練習は土曜日の夕方に行っていますが、なかなか人が集まらず、毎回少人数での練習を強いられているのが現状です。全体での練習の少なさは確実にチーム力に影響しています。来期は、練習場所や曜日、時間帯などを考え直し、充実した練習が出来る環境作りも課題の一つです。

四月から始まったリーグ戦は、現在残り一戦を残して、五勝一分け四敗で二部リーグBブロック五位と低迷しています。開幕からの五試合で二勝三敗と良いスタートを切れなかったことが響いてしまい、今季の一部昇格は手の届かないものとなってしまいました。敗因は主に、試合終盤の体力不足と集中力の途切れ、連携不足によるミス等が挙げられますが、やはり練習不足が大きなウェイトを締めています。それに加えて、試合毎にメンバーが入れ替わってしまい、試合で初顔合わせとなり、連携が即興のぶっつけ本番になってしまうことが多々ありました。他にも様々な課題が見つかったので、今季から得られた課題を消化していきながら、トトカルチョ湘南は来シーズンの「一部昇格」を目指して、闘っていきます。

最後に、トトカルチョは新しいメンバーを募集しています。現在私たちは学生から社会人まで幅広い年齢層で活動しています。個々の事情から、なかなか人数が集まらない事もよくあるので、新規メンバーに、ぜひ新しい風を吹き込んでほしいです。特に学生の方や若い世代の加入を心待ちにしています。チームには様々な社会人の方がいて、いろいろな話を聞くことができますし、なにより、同じ湘南高校サッカー部に在籍していた多くの仲間達との熱いサッカーが待っています。少しでも気になった方は先生や先輩に気軽に声をかけて下さい。私たちと共にサッカーをしましょう！

06年を終えて

監督　清水　好郎

私も本校に赴任して10年が過ぎました。

10年の間に湘南高校も随分様変わりしました。

4年前から中学校の評価が相対評価から絶対評価に変わり生徒の気質も変わりました。

言われたことは出来るのですが、物事を考えて判断する力がなく主体的な行動が出来なくなっています。

3年前から1月に前期試験が行われ、調査書と面接だけで60名程度、合格するシステムが出来ました。

2年前には学区撤廃され、地元の旧学区内の生徒は50％を切ってしまいました。

今年度の1年生の旧学区内は40％に落ち込んでいます。サッカー部の部員も2年生16名、1年生は11名です。（3年は学区内が75％で部員は26名でした）今年度は本校独自の問題が入試に導入され来年度の新入生に不安があります。

生徒の気質も、学校の雰囲気も変わってきました。

サッカー部は2回目のスペイン遠征を行うことが出来ました。細かい報告は相羽さん3年生の篠塚くんに任せて、簡単に感じたことを述べます。前回の生徒に比べて体調を崩す生徒が多くいました。適応能力の低さ、自己管理が出来ない、親の過保護を感じました。また、今回も二人のマネージャーは元気よくビルバオ、バルセロナ、パリと精力的に堪能し

ていました。女性の強さを改めて感じました。

今年度は3年生の中心のチームで下級生が伸び悩みレギラーを脅かすまで至らずチームの成長が今一歩でした。

春先、スペイン遠征の遺産で関東大会予選はベスト8、総体予選は雨の中、日大藤沢に体力負けしてしまいました。選手権予選は私のミスでチームを変えしまい2回戦で敗退してしまいました。チーム力としては上位の力があっただけに残念でした。

新チームは他校に比べて26人という少ないですが新人戦の県大会進出を決めました。U17リーグは現在1勝1負1分けです。年明けまで続きます。

神奈川県高校サッカーのレベルはそんなに高くなく、個人の能力だけで勝っているように思われます。湘南も個人の能力を向上と集団の戦術の理解を深めて上位を目指したいと思います。

今後ともOB各位の応援のほど宜しくお願い申し上げます。

スペイン遠征紀行

三年　篠塚　貴志

「日本の常識世界の非常識」。二〇〇六年三月、私たちはこの言葉の意味を肌で感じることになる、全てが日本と異なる世界、スペインを訪れました。

スペインのサッカー環境は、私たちにとって「日本とこうも違うものか?」と感じるほど整っていました。行く先々のグラウンドは天然芝、あるいは人工芝ばかりで、更衣室、シャワー完備、さらにクラブハウスにはバーまで付いているほどです。そして街には、サッカー以外のスポーツはないのか、と感じられるほどサッカーが溢れていました。私たちの試合には、子供から大人まで多くの地域の人々が観戦に訪れ、試合中に私たちの名前を（試合の中で呼ばれた名前を聞いて）呼んで応援し（ほとんどが「やじ」だったのかもしれませんが）、とにかくサッカーを楽しんでいました。サッカーがすべての人に愛されているこのような環境でサッカーができたことを、この上なく幸せに思っています。

遠征中私たちは多くの試合をしました。スペイン人（特にビルバオの人）は異常に身長が高いので（年下で百八十センチ以上ある人もたくさんいました）、ディフェンスディスタンスが広く、パスを出すタイミングもプレースタイルも、それまでに対戦した相手とは全くといっていいほど違い、非常にやりづらい相手だったと思います。しかし、スペインのリーチが長い相手に対してドリブルが通用した、あるいは身長差にもかかわらずヘディングで競り勝てたことにより、大きな自信を得られたメンバーも少なくありませんでした。

そして遠征五日目、私たちは生涯忘れないであろう試合を経験しました。アスレティックビルバオのユースチームとの試合です。スペインリーグ一部のチームの下部組織、つまり将来リーグでプレーする選手が数多く所属するチームとの試合です。日本でマリノスユースと試合するのとは比べ物にならないほど貴重な経験だったでしょう。

苦しい試合でした。天然芝での、しかも四十分ハーフの試合です。体力的にも厳しく、終始ボールを支配されている中で、私たちはどうにかしていい形でボールを奪い、攻撃につなげようと必死でした。しかし相手の強く正確なパス、鮮やかなボールコントロール、そして素早いトラップからパスへの切り替えの前に、私たちの必死のアプローチもほとんどが無意味なものだったと思います。それでも私たちはプレッシャーをかけるのをやめず、相手が攻めこむスペースを与えないように最後まで走り続けました。そして結果的には五対〇という惨敗でしたが、前半を二失点でおさえ、格上の相手に対しても、ある局面では自分たちの練習して来た三対一・四対二を軸とするディフェンスが通用したことに関しては、清水先生も満足していたようです。（オフェンスに関しては、最初から通用しないと思っていたそうです）しかし、全く攻撃が通用せず、防戦一方となってしまったことに自分たちの無力さを感じ、非常に悔しい思いもしました。

私たちはこの試合で、三対一・四対二の練習の意義、そして「トラップ→パス」への動作の切り替えの速さ、正確なトラップ・強いパスの重要性を実感し、それと同時に自分たちの技術の低さを知ったことにより、帰国後、それぞれが練習への取り組み方を考え直しました。この試合こそが、その後の関東予選ベスト8という結果をもたらしたのだと確信しています。

十日間、多くのスペインやフランスの人々とのコミュニケーションを通じて、言葉が通じることの喜び、「挨拶」の大切さなど、日本では知ることのできない

多くのことを学びました。しかしそれだけではなく、サッカーに対する考え方が変わる経験もすることができました。それは二日目のジョディオ（最初に宿泊した街）での練習を終え、午後、街へ買い物の行ったときのことです。初めての買い物を楽しみ、店員に言葉が通じたことに感動しながら歩いていると、学校がありました。そこを通り過ぎようとすると、中から小学生が興味深そうにこちらへ寄ってきて、サッカーをしようと誘ってきたのです。驚きました。小学生が、明らかに年上の私たちを何の違和感もなく誘ってきたのです。日本ではありえない光景でした。そして、私たちはそこにいた小学生から高校生まで、多くの子供たちとサッカーをしました。（その中にはジョディオで最後に試合をしたチームの選手もいたようです）彼らは私たちが何者なのか、どこから来たのかも知らないのに、そんなことは全く気にせずに、楽しんでいました。年齢や技術の差がある相手とはサッカーをしないのが当たり前になっていた私たちにとって、些細なことを気にせず過ごしたこの時間は、サッカーの本当の楽しさを教えてくれた一生の宝物です。そして生活や文化の面だけだと思っていた「私たちの（日本の）常識が世界の非常識である」ことをサッカーの面でも感じることになったのです。

私はスペインで「湘南高校サッカー部」と「アスレティックビルバオ」との強い関連性を感じました。ビルバオは、スペインでもっとも古いクラブチームです。そして地元の人々はその伝統に誇りを持ち、年間シートのチケットを買って毎試合応援し、金銭的な援助をするなどして、リーグをはじめとする欧州の多くの大会での優勝を誇るチームの輝かしい伝統を守っていこうとしていました。湘南高校も同じではないでしょうか？ＯＢの多く方々が、非常に長い歴史を持ち、全国大会で優勝したほどの湘南高校の素晴らしい伝統に誇りを持たれ、そしてその伝統を守っていこうと様々な面で現役選手（私たち）を支援し、応援して下さっています。清水先生がビルバオというチームにこだわる理由もそこにあるのでしょう。残念ながら私たちはＯＢ皆様の「全国大会出場」という期待に応えられませんでしたが、湘南の伝統とはどういうものなのかを肌で感じたことを生かし、これからも湘南高校サッカー部の伝統継続と発展に尽力していきたいと思います。

スペイン遠征の実現には、私たちを影ながら支えてくださった鈴木中先生や、多くのＯＢ、保護者の方々が協力して下さいました。私たちに一生の思い出となる数々の経験をさせて下さり、サッカーをより愛し、少しでも大人へと成長するきっかけを与えてくださったことに、深く感謝しています。そして遠征中私たちを支えてくださった、清水先生、マネージャー、嶋貫さん（Ｆｕｔｂｏｌ—Ｐｌｕｓ）、加藤さん（ＪＴＢ）、そして団長の相羽さんへの感謝の気持ちを忘れずに、これからの自分の人生に、「世界の常識」を（わずかながら）知ったこの旅を生かしていきたいと思います。

2006年度 公式戦試合結果

［関東大会予選］

2回戦　4／16　湘南　1—0　平塚学園
3回戦　4／22　湘南　0—0　川崎北
延長　0—0
ベスト16　ＰＫ　5—3
4回戦　4／23　湘南　1—1　座間
延長　1—0
ベスト8　（2—1）
5回戦　4／30　湘南　1—1　秦野
延長　0—1
（1—2）

［高校総体］

2回戦　5／13　湘南　0—0　浅野
延長　0—0
ＰＫ　4—3
3回戦　5／14　湘南　5—0　舞岡
4回戦　5／21　湘南　1—1　横須賀学院
延長　1—0
（2—1）
5回戦　5／27　湘南　2—4　日大藤沢

［選手権予選］

2回戦　7／23　湘南　0—3　横浜翠嵐

［新人戦］

10／1　湘南　6—0　藤沢総合
10／8　湘南　2—0　藤沢翔陵
10／29　湘南　2—0　湘南通信
11／11　湘南　1—0　鎌倉学園　県大会出場
11／23　湘南　0—1　大清水
11／25　湘南　1—0　湘南工科　県大会第3シード決定